

第一回国宝松江城マラソンに参加して

令和元年 9 月 11 日

松江北高 29 期、53 年卒 里田弘志

平成 30 年 12 月 2 日日曜日。第一回開催となる国宝松江城マラソンに参加してきました。

メタボ対策でランニングを始めて五年余り。これまで 13 回フルマラソンに参加してきましたが、島根県でフルマラソン大会が開催されるのは実に 14 年ぶりとのことで、エントリー開始とともに申し込みました。定員が 5000 名のところ、すべての都道府県からエントリーがあったほか、香港からの参加者もあり、計 5652 名が参加しました。

私は当時茨城県つくば市に住んでいたのですが、金曜日の最終便で松江に里帰りし、土曜日に、スタート地点の総合体育館でナンバーカードを受け取りました。この総合体育館は、北高の校舎が現在の赤山に移転する前の敷地の東隣に位置していますが、当時は広々とした田んぼだったはず。その頃をしのばせるものはほとんど残っておらず、すっかり様子が変わってしまいました。

さて、いよいよ大会当日となりました。山陰らしいしぐれた天気になるのではないかと心配していましたが、ふたを開けてみると、天気は晴れ、気温 10℃、無風と、これ以上ない絶好のコンディションとなりました。コースは、松江市中心部を一周したあと、大根島に向かい、本庄から津田を経て総合体育館に帰ってくる 42.195 キロのコースです。ほとんど高低差はありませんが、30 キロ過ぎにアップダウンがあり、そこまでのペース配分が試される良コースです。

スタートは午前 8 時 45 分。勇壮な鑿行列に見送られて体育館前から一斉にスタートしました。スタート地点から西にまっすぐ伸びる四車線の大手前通りをいっぱい埋め尽くすランナーが、次第に大きくなる松江城に向かって約 1 キロ走ります。この大手前通りは、平成 15 年度から工事が進み、平成 30 年 8 月に全線が開通したばかりの松江のシンボルロードです。電線も地中化されているようで、広々とした感じがします。道の両側には、たくさんの人々が応援に出てきて頂いていました。



通りが松江城に突き当たったところで左折し、県庁を右手に見ながら宍道湖に向かいます。実

はここに家族や親戚、友人が応援グッズを用意して待ち構えてくれていて、大声援をかけてくれました。うれしくもあり、照れくさくもありましたが、これも故郷開催ならではの喜びでした。

県庁から宍道湖大橋に向かう途中で、背中をポンと叩く人がいました。誰？と振り向くと、何とゲストランナーのエリック・ワイナイナさんが、追い越しざまにランナーの背中にタッチしていくところでした。こんな有名人に会えるのも大会ならではのです。ちなみにワイナイナさんとはゴール後にも出会い、ちゃっかりツーショットの写真を撮ってもらいました。



宍道湖大橋からは、穏やかな湖面に浮かぶ嫁が島や、湖岸に立つ県立美術館が迎えてくれました。ここで立ち止まり、写真を撮っていくランナーもたくさんいました。

コースは9号線を東にとり、西津田で北上し、再び総合体育館前に戻って、今度はここから東進。大橋川沿いを大根島に向かって走りました。私が北高生だった頃は、この道を大海崎まで往復するロードレースがあり、男子は27キロ、女子は18キロを走りました。まさか四十数年後に同じ道を走ることになるとは、当時は夢にも思っていませんでした。今でもロードレースはあるとのことですが、上乃木の市立陸上競技場から八雲方面を走るコースになっており、男子は15キロ、女子は10キロを走るとのことです。

コース沿いでは、近隣の方々の応援が途切れることがありません。中には大きなボードを掲げたり、私設エイドでは松江城のかぶりものでおもてなしして下さる方も。特に、施設の前で、車いすに乗って手を振って下さるお年寄りを見ると、思わずこちらも手を振り返してしまいました。また、小さな子供が手を出してくれると、ハイタッチで応えたいくなります。こうして応援して頂くことが走り続けるための大きな力になりました。



コースは大海崎から締め切り堤防上の道を経て、コースの中間地点である大根島に渡ります。冬の季節風が強いと、吹きさらしの中を走るところでしたが、穏やかな天気のおかげで気持ちよく走ることができました。自動車のCMで「べた踏み坂」として有名になった江島大橋を横目に

見ながら本庄に向かいます。美保関から本庄を通る頃に 30 キロ地点を通過。素敵な道の駅が迎えてくれました。本庄は「弁慶の故郷」として只今売り出し中。弁慶さんも沿道で応援してくれました。



このコースで最大の難所が、35 キロ付近と 40 キロ手前に待ち構える二つの坂。いわゆる「30 キロの壁」に苦しむ市民ランナーにはなかなか厳しい試練で、ここから歩いてしまう人もたくさんいました。ただ、ここを越えて、だんだん道路の川津インターを過ぎてしまえば、あとはゴールに向かって緩やかな下り坂を走り抜けるだけ。心の中で「サライ」と「負けないで」が繰り返し鳴り響く中、家族や友人が待ち構えるゴールにたどり着くことができました。ボランティアの皆さんや、沿道で応援してくれたたくさんの方々に支えられて、最後まで楽しく走りきることができました。

記録よりも、家族や知人、沿道の皆さんとの触れ合いを楽しめた、記憶に残る大会となりました。これも故郷で開催された大会ならではの、ぜひ第二回以降も参加したいと思います。第二回のゲストランナーは有森裕子さんだそうで、これも楽しみです。

